

夙川学院短大○山本 昌子 相愛女短大 藤田 公子
鳴門教育大 藤原 康晴

目的 社会における多くの現象は社会規範によって規制されており、服装においても性別、場面別などに関する社会規範があって服装の秩序が維持されている。しかし、最近、服装における個性化が主張されるようになり、服装規範にも変容が見られるようになった。

ここでは6項目の服装規範について、どの程度同調した行動をとるか、親や友人の考え、自分自身の考えを測定し、Fishbeinモデルを適用してその関連性を検討した。

方法 服装規範として、1) 夏季、一流ホテルでの食事にTシャツを着ていく。2) 右の身頃にボタンのついたシャツブラウスを着る、など日常生活の各場面の服装を写真で示し、行動意図は「ありそうだ」から「ありそうでない」までの7段階で評定した。またこの6項目の各服装に対して、対象者自身はどのように思うか（態度）、親や友人はどのように考えると思うか（主観的規範）をいずれも7段階尺度で測定した。

結果 各服装規範に対する行動意図を「ありそうだ」から「ありそうでない」までを3カテゴリーに分け、態度、主観的規範についてもそれぞれ3カテゴリーに分割し、行動意図と態度、行動意図と主観的規範のクロス集計を行った結果、5項目については1%水準、1項目の行動意図と主観的規範については5%水準で関連性が認められた。また行動意図を外来的基準とし、態度、主観的規範を独立変数として重回帰分析した結果、5項目の服装について標準偏回帰係数（ β ）は態度より主観的規範の方が大きくなっており、一般的に着装の自由、個性化の傾向といわれながらも規範への同調行動の傾向がみられ、この種の服装規範には、親や友人など、重要な他者の期待がかなり強く反映されていることがわかった。